

ありつつも我は至らむ

渡部 和雄

一

東歌に、三四二八

安太多良乃祢尔布須思之能安里都々毛安礼波伊多良牟祢度奈佐利曾祢

安太多良の嶺に伏す鹿猪のありつつも我は至らむ寝処な去りそね（全集）
という歌がある。

『全集』 安太多良の嶺で寝る鹿猪のようにこうして絶えずわたしは逢いに行こう、寝間を離れないでくれ。

上二句は主語句、「の」は比喩格である。従つて「のよう」と「ありつつも」に掛かっている。「第三・四句を起す序」とある。

その第三句「ありつつも」は二六七一に、「いつまでもこうして。心を変えないことをいう」とある。二六七一は、

今夜の有明の月夜ありつつも君をおきては待つ人もなし

という歌である。ここでも上二句は「アリ」を起こす同音の序である。主語＋述語形式ではないから、「ありつつも」は上二句の属性を持たない。だからこの「ありつつも」の主語は作者（私）である。勿論「有明の月夜がありつつ」という内意はある。

『全集』　ありつつも―このままにあなたのほかには待つ人はありません
 というのは、（私は）「このままに」（で）ということであろう。

この形は、八七、

在管裳君乎者將待打麿吾黒髪爾霜乃置万代日　（ありつつも君をば待たむ）
 に対応する。

『全集』　いつまでもこんなふうにして、の意。

『注釈』　ありありても　（いつまでもかうして君をお待ち申しませう。）

「ありつつも」が「ありありても」だとすると、へいつまでもこうしてへこのままじつとしていてへ内容になる。主語が作者（私）であればへこうしていてへは述語になる。しかし、「安太多良の嶺に伏す鹿猪の」の述語、いわば第三者、景物の述語になるのは難しい。へ鹿猪がへこのようにしてへというのは理解しにくい。ましてへ鹿へとへ猪への二種がへこうしているへのは面倒である。

一・二句「安太多良の嶺に伏す鹿猪の」と三・四句「ありつつも我は至らむ」の関係が把握できない。

『万葉集東歌の研究』（豊田八十代）

上三句は、猪が伏處を定めて容易に他に移らないといふ習性を捕へて、寝處な去りそねにかかる序とした。

というのは、「安太多良の嶺に伏す猪のありつつも」―「寝處な去りそね」であろう。そのためには「しし」は「猪」という一種でなければならぬ。肉用動物ではそうはならない。

ただ「安太多良の嶺に伏すししの」(一・二句)は一般的には序(比喩格)である。それは「ありつつも」(第三句)の主語であるのが普通である。そこで、

『万葉集全注 卷第十四』(水島義治)

○伏す鹿猪の 臥す鹿や猪のように。ここまでの上二句、下の「在りつつも」を起こす譬喩式序詞。結句の「寝處な去りそね」にもひびかしている。

ということになるであろう。

「安太多良の嶺に伏すししの」(ヨウニ)「寝處な去りそね」はあるうるかも知れない。

『全注』の口訳は、

安達太良山で、いつもきまった峠に寝る鹿や猪のように、いつまでも変わらずに通って行こう。(だから)いつも同じ寝場所で待っていておくれ。

とある。考えつくした訳であるが、へいつもきまった峠に寝る鹿や猪のようにへいつまでも変わらずへは余り良い掛り方ではない。

「ありつつも」が作者(私)の属性(述語)であるとする、

ありつつも我は至らむ／安太多良の嶺に伏す鹿猪の寝處な去りそね

という形の歌が成立してもいいと思われる。「寝處な去りそね」は「嶺に伏す鹿猪」が語句的には近いし、多分、猪だろう(鹿をししとは云わないだろう)「しし」が安太多良の嶺に住んでいることは誰でも知っていることだったろ

う。

右を『全集』の口訳で示してみると、

こうして絶えずわたしは逢いに行こう

安太多良の嶺で寝る鹿猪のように寝間を離れないでくれ

という順序になる。

「ありつつも」には「こうして絶えず」という内容があったことになる。私は、こうして絶えずである。これは当然、八七「ありつつも君をば待たむ」に相応してくる。

「嶺の……ある・をる・わたる」の型に次のようなものがある。

二六九五 我妹子に逢ふよしをなみ駿河なる富士の高嶺の燃えつつかあらむ

二六九七 妹が名も我が名も立たば惜しみこそ富士の高嶺の燃えつつ渡れ

或歌曰 君が名も我が名も立たば惜しみこそ富士の高嶺の燃えつつも居れ

ここでは富士の高嶺の噴煙と心が燃えることが掛けてある。

「富士の高嶺」が主語で、「燃え(つつ)」が述語である。「ある・をる・わたる」が述語によって修飾、限定されている。

『全集』 原歌は男の作だが、或歌のほうは女の歌。「妹」と「君」、「我妹」と「我が背」など、相互に人称代名詞を取り換えて、男女両方に歌われることは民謡に例が多い。

とあるのは参考になる。これは集団性を持つ儀礼歌であろう。「ある・をる・わたる」の中味ははっきりしている。

即ち「ある」には何か内容、状態がなければならない。

三三六〇 伊豆の海に立つ白波のありつつも継ぎなむものを乱れしめめやにしても「あり」は何か内容を含んでゐるはずである。主語＋ありへ述語だけには於ては、次句への修飾的意味は生起しない。万物はすべて「ある」のである。

ここでは「立つ白波」の属性（述語）が「あり」の中味である。

ありそによする 三九九一

いさきめぐれる 九三一

いちしろくいでぬ 三〇二三

三九三五

おもしろきみが 三〇一五

きよするしまの 三七三三

たかきあるみを 一四五三

ちへにきよする 九三二

はままつがえの 三四

へにもおきにも 三一五八

やへをるがへに 四三六〇

一一六八

よするいそみを 三九六一

よせくるたまも 三九九四

よそるはまへに 四三七九

などから見ると「白波の」は「よする」「きよする」を属性とするであろう。けれどもこれらの述語は、みられるように、心情を修飾している例はない。卷十二には「いちしろく」「おもしろ君」のような表現がある。

元々、「ありつつも」という個人的、感情的様相を示す語が自然、景物に結びつけられた、その述語になったのであるから、二者の關係に近づくのは容易でない。

二

八七 ありつつも君をば待たむ打ち靡くわが黒髪に霜の置くまでに

『全訳注』（中西進）

日々をありつづけて

八九 居明かして君をば待たむぬばたまのわが黒髪に霜はふるとも

一夜を寝ずにあかして

という「ありつつも」の主語は作者（私）である。述語は「へありありても」の性質になる。八九は異伝で、代りに使われている言葉が「居明して」だから、「ありつつ」の具体的内容を示している。逆に「ありつつも」の方は、「いつまでもこんなふうにして」（全集）でよいことになる。というより、この万葉集の最初の「ありつつも」がこうして規定されてきたわけである。

解釈というのは方言や地方やといったバロックアイオーンというのは含まれない運命を持っている。

三二四 神岳に登りて山部宿祢赤人の作れる歌

……つがの木のいや継ぎ継ぎに、玉かづら

絶ゆることなく、ありつつも止まず通はむ

『全訳注』 ありつづけて、ずっと。「あり通ふ」の語(三〇四)もある。

ここで面白いのは「絶ゆることなく」と「ありつつも」は表裏の關係になっていることである。

五二九 佐保川の岸のつかさの柴な刈りそねありつつも春し来らば立ち隠るがね

『全訳注』 ありつづけて・そのままにして

『全集』 こうしておいて・このままにしておいて

柴が ありつづけて・そのまま、という云い方も可能ではあるうが、「柴な刈りそね」は「柴ヲな」であろうから、〈柴ヲ〉「ありつつも」という連用修飾は〈このままにしておいて〉へそのままにしてゝという風になつてしまふ。ここでは作者(私)の「ありつつも」はくずれている。

一二九一 この岡に草刈る童な然刈りそねありつつも君が来まさむみ馬草にせむ

『全集』 いつまでもこうしておいて。このアリは、そのままにする、の意。

という。へするゝという意志、期待が表わされていること前の歌に似ている。「君が来まさむ」は連体形だから、四・五句を修飾している。

一二三〇 九月の有明の月夜ありつつも君が来まさば我恋ひめやも

『全集』 こうありつづけて

は先にも挙げたが、上二句序、「ありつつも」の主語は作者（私）である。

二三六三 岡崎の廻みたる道を人な通ひそありつつも君が来まさむ避き道にせむ

『全集』 そのままで・いつまでもこのようにして

二六七二 今夜の有明の月夜ありつつも君をおきては待つ人もなし

『全集』 いつもこうして・このままに

三三六〇 伊豆の海に立つ白波のありつつも継ぎなむものを乱れしめめや

或本歌曰 白雲の絶えつつも継がむと思へや乱れそめけむ

『全集』 伊豆の海に立つ白波のように

波が続いて寄せ、絶えないことから、第三・四句を起す序とした。

「立つ白波の」が主語句、〈絶えない〉が述語で、「このままずっと愛しつづけよう」、と訳されてくる。

或本では「白波のありつつも」が「白雲の絶えつつも」となっていて、

『全集』 以上は、絶エツツモ継グを起こす序。途絶えがちでも続けよう……

という。「白雲」の述語は次のようである。

いほへにかくり 二〇二六

おもひすぐべき 六六八

たえにしいもを 三五一七

たつたのやまの 一七四七・九七一

たつたのやまを 一七四九

たなびくくのに 三三二九

たなびくやまの 五七四・七五八

たなびくやまを 四〇〇六・一六八一・二八七

ちへにへだてる 八六六

ちへをおしわけ 四〇〇三

はこよりいでて 一七四〇

とあって、「白雲の」は「たつたのやま」「たなびくやま」にかかるのが一般的で「たえ」にかかる例は一つしかない。その歌は、

三五一七 白雲の絶えにし妹をあぜせろと心に乗りてここばかなしけ

と問題の「白雲の絶えつつも継がむと思へや乱れそめけむ」の二例だけである。

即ち「白雲の——絶え」は東歌にだけしか存在しないのである。そして三五一七の「あぜせろと」「ここばかなしけ」などの語句は東国のもものと見られるから、「白雲の——絶え」も東国の表現と思われる。

とすると、或本の歌は東国的な歌で、「ありつつも」を持つ本文歌は万葉集の他の巻にも関係的に成立してきた歌と思われる。

この本文歌と或本歌について、

『私注』 シラナミの歌が、女の立場から、続けよう恋ではありますものを、乱れさせはしませんよと、詰めよる心持ちであるに對して、（或本歌は）男の立場として、何を言はれるか。そちらから絶えても絶えても、即ち疎遠がちにされても、続けようと思はれようか。そんな馬鹿げたことは出来はしない。それだから、こちらからも乱れ始

めたのでせうと、やり返して居ると見るべきだ。

『東歌疏』 或本の方が、相手方の心のゆるみを咎めたのに対して、本文の歌が、それに答へて、決してさうでないと誓ったもの。

という見方もある。

本文歌と或本歌では、或本歌が先にあつて、それに答えるようになってるのが本文歌である。「乱れ初めけむ」に対して、「乱れしめめや」がある方が自然である。

「白雲の絶えつつも」には、そう表現する可能性が、とにかく東歌にはあつたと見られるが、「立つ白波のありつつも」には、従来からの基盤が見られないこと前述した通りである。

『全集』 立つ白波の―以上二句、波が続いて寄せ、絶えないことから、第三・四句を起す序とした。○継ぎなむものを―絶える事無く愛していようと思うのに。

というのは考えつくした訳である。面白ことに、ここには「絶え(ない)〜」という語が入ってきている。白波の絶えない性質をいつている。そして「絶えることなく愛していよう」と続く。この白波の―絶えず―継ぎなむは、立つ白波(主語)の述語「ありつつも」をのけものにすることができる。

伊豆の海に立つ白波の(―) 継ぎなむものを

という形と同じものである。即ち右の(―)には「絶え(ず)」が入っていることにもなる。あるいは「絶えつつも」でもいいだろう。

四二二八 ありつつも見したまはむそ大殿のこのもとほりの雪な踏みそね

『全集』 このままにしてご覧になるだろう

○ありつつも―ずっとこのままの状態を続けて。雪が消えずに残ることをいう。

とすれば、この「ありつつも」は残雪の状態、対象の様子である。

だとしたら「白波の―ありつつも」はその白波の状態をいつている。白波が立って消えて、立って消えて、それが絶えない状態。

四三〇二 山吹は撫でつつ生ほさむありつつも君来ましつつかざしたりけり

『全集』 ずっとこんなふうにして

これは自分の状態、だから「ありつつも―君をば待たむ」に似ている。

作者自身の状態と対象の状態の「ありつつ（も）」は含まれる幅が違うかも知れない。『注釈』では、「鹿猪は同じねぐらに棲む習性がある」という風に、これも新しい視点はない。

三

似た表現をあげてみると、

二七五七 大君の御笠に逢へる有間菅ありつつ見れど事なき我妹

『全集』 ありつつ―ずっと見ているが

二二八八 石橋の間々に生ひたるかほ花の花にしありけりありつつ見れば

『全集』 ずっと見ていると

三四〇七 上野まぐはしまとに朝日さしまきはしもなありつつ見れば

最初のは卷十二、次のが卷十、最後のが卷十四（東歌）の歌である。いわゆる作者未詳歌中であつて、関連した語句を持つ仲である。

こうして一首の歌を成立させ、伝播したからには、行動には移さないけれども、心的な期待、意志が込められていた語句であつたには違ひない。対象を注意して窺っている様子がある。主語はすべて作者（私）である。二七五七は「アリマスゲーアリ」の關係で、「ありつつ」を制約しているものはない。

これも卷十二のものであるが、

三一一三 ありありて（在有而）後も逢はむと言のみを堅く言ひつつ逢ふとはなしに
『全集』 ずっとこのようにしていつて

三一一四 極まりて（極而）我も逢はむと思へども人の言こそ繁き君にあれ

右二首

これは問答歌で「ありありて」と「極りて」は同じ内容を言っていることになる。

「ありありて」はこれ一例であるが、「ありありて―後」の表現は、

ありさりて いまならずとも 七九〇

ありさりて 後もあはむと 三九三三

ありさりてしも いまならずとも 三〇七〇

と似た表現がみられる。

ほとんど慣用になつていて、時間の経過を示している。「今」に対する「後」をいう。だから一種へいわけゝ的表現のようである。いつてみれば「安達太良の嶺に伏す鹿猪の―ありつつも」には何かしら力がある。

四

さて以上を概括してみると、主語句（自然・景物）＋「ありつつも」（述語）の関係を持つのは東歌の二例だけである。

東歌では、本文歌と或本歌が問答、対応歌であつたであろうと推定すると、

三三六〇 立つ白波のありつつも

或本歌 立つ白雲の絶えつつも

は同水準、少くとも相互理解が可能なものとしてあつたのではないか。

そして東歌の〈問答〉では或本歌の方が先であつた。

「絶えつつも継ぎなむ」の水準に「ありつつも継ぎなむ」があるのではないか。即ち「ありつつも継ぎなむ」は「絶えつつも継ぎなむ」と同等、相互理解であつたのではないか。「継ぎなむ」は、立ちては消え、消えては立つて、の故に「継ぎなむ」なのではないか。諸注へ絶えることなく愛していようという風になっているのは右のせいではないか。「つぎなむ」は「絶えつつも」の属性としてある。

「ありつつ」に比して、「ありつつも」には、意志的な表現を引き出す力がある。

―君をば待たむ

―止まず通はむ

―春し来らば立ち隠るがね

―君が来まさむみ馬草にせむ

―君が来まさむ避き道にせむ

―君が来まさば我恋ひめやも

―君をおきては待人もなし

―繼ぎなむものを

―我は至らむ寝処な去りそね

―見したまはむを

―君来ましつ

と「ありつつも」「……む」などの形ができていて、元々作者の「ありありて」が基礎になっているせいだろう、対象には「君」が来るといふ形が多い。

こうして「ありつつも」には作者の意志、願望、期待が込められているから、次第に対象になにかを要求することになる。

それにしても最初の「ありつつも 君をば待たむ」と「ありつつも 我は至らむ」は逆方向への表現でさえある。それで同じ東歌の、

「たえつつもつがむと思へや」

「ありつつもつぎなむものを」

「ありつつも我は至りむ」

を同じ水準（というか、使用法）としてみると、へたえてもたえてもずっと続ける」に対して、作者は里（平地）にいて「嶺に伏すしし」を詠んでいるわけだから、

へ里に出て来ては山に帰り、また出てくる」という風に受け取っているのではないか。

へ絶えずに・いつもいつも」とも受けとれるが、へ途切れてまた出現するように、間に絶えることがあっても、私は
継いで行こう―寝処な去りそね、というのではないか。

行かない日があるからといって―寝処な去りそね、といっているのではないか。

極言すれば、「絶えつつも我は至らむ」といっているのではないか。